東日本大震災
復興フォト＆スケッチ展 2015
作品集

復興の歩み ～想い、つなぐ、明日へ～

街に、ルネッサンス
UR都市機構

一日も早い東北の復興へ
全力で取り組んでいます

復興の歩み ～想い、つなぐ、明日へ～

ごあいさつ

東日本大震災から間もなく5年を迎えようとしています。

UR都市機構は、発災直後より被災地へ職員を派遣し、復旧・復興活動に取り組んでまいりました。

各地で復興事業は本格化し、完成した事業地区も増えつつあり、

復興に向けて着実に歩みを進める人々やまちの様子を見ることができるようになりました。

このフォト＆スケッチ展は、これまでの復興への歩みを広く発信することで、

全国の皆様に被災地の様子を知っていただくとともに、被災された方々にとって

希望を感じられる場になればという思いで、昨年度から開催しております。

「復興の歩み～想い、つなぐ、明日へ～」というテーマのとおり、まちや暮らしの風景の中に、

明日への想いが込められた作品を全国から多数お寄せいただきました。

多くの皆様からの作品応募に、心よりお礼申し上げます。

このフォトスケッチ展を通じて、被災地の方々の復興に対する気持ちを、

少しでも多くの方々に伝えられれば幸いです。

目次

UR都市機構の復興支援 04

フォト＆スケッチ展概要 06

審査員プロフィール 08

受賞作品・応募作品の紹介 10

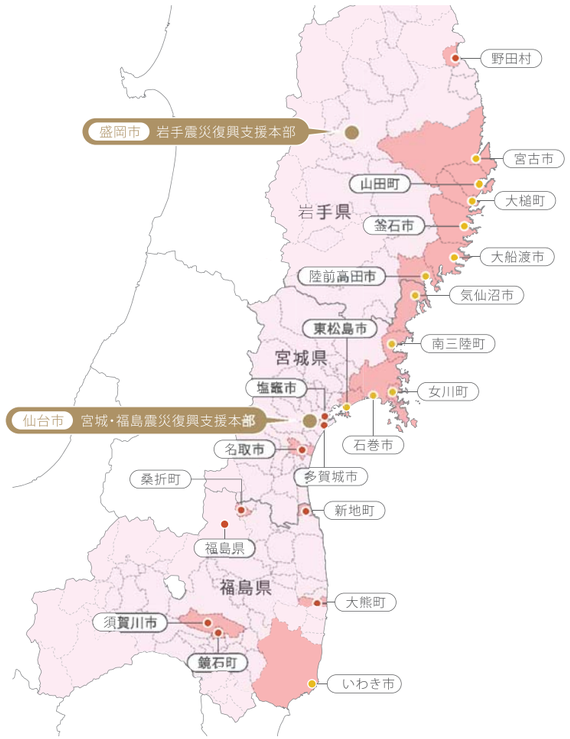
- 復興の歩み大賞　フォト 12
- 復興の歩み大賞　スケッチ 14
- 復興の歩み賞 16
  （大西 みつぐ・千葉 学・なかだ えり・池邊 このみ・UR都市機構 選）
- 入賞 26
- 応募作品 34

審査の風景 38

- 受賞者および有識者審査員の敬称は省略させていただいております。
- 受賞作品の紹介内容は原則下記の順で掲載しております。
  作品タイトル／氏名／撮影・スケッチの対象場所（県、市町村）／メッセージ
- 応募作品はトリミング加工の上、掲載しております。

UR都市機構の復興支援

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は未曾有の被害をもたらしました。
UR都市機構はUR賃貸住宅や応急仮設住宅建設用地の提供、応急仮設住宅建設のための職員派遣など震災当初から支援を開始。
続いて、被災自治体における復興計画策定支援等のため職員派遣を行いました。
現在では、22の被災自治体と協定等を締結し、現地体制を強化して復興まちづくりの支援を行っています。



- 《 震災復興支援本部 》 事業の統括、設計、工事発注、契約手続きを行います。
- 《 復興支援事務所（12箇所）を設置する自治体 》 現地に事務所を設置し、市街地整備、住宅整備を推進します。
- 《 復興まちづくりを支援する自治体 》 主に震災復興支援本部を拠点に、市街地整備、住宅整備、事業コーディネート、人的支援等を行います。

復興支援MAP

ＵＲ都市機構は、岩手・宮城・福島の計22の自治体で復興支援に取り組んでいます。

岩手県下閉伊郡山田町
織笠跡浜団地

岩手県大船渡市
市営住宅蛸ノ浦アパート

岩手県宮古市
田老地区高台団地
（三王団地）

宮城県女川町
中心部地区

宮城県東松島市
野蒜北部丘陵地区

宮城県多賀城市
市営新田住宅

宮城県名取市
市営住宅美田園北団地

福島県伊達郡桑折町
桑折駅前団地

復興まちづくり支援の歩み

東日本大震災発生

平成23年4月 岩手県下への派遣開始	平成23年7月 宮城県下への派遣開始	平成23年11月 福島県下への派遣開始	平成24年4月 現地に専任チームを配置	平成25年4月 現地復興支援事務所を設置	平成26年4月 仙台・盛岡に震災復興支援本部を設置	平成27年4月 福島における現地復興支援体制を強化
URの現地支援体制 17人	37人	59人	172人	303人	400人	418人

いわきニュータウンに建設された
応急仮設住宅

福島県と基本協定締結（平成25年11月）

権利者約1,800人を対象に
約50回の住民説明会等を実施（宮城県女川町）

大量土の搬出のため設置された
ベルトコンベヤー
［平成27年9月完了］（岩手県陸前高田市）

- **復旧支援**
  ＵＲ賃貸住宅延べ970戸の提供。
  応急仮設住宅建設用地約8haの提供。
  延べ184名の技術職員を派遣。
- **協定締結**
  22の被災自治体との間で、
  復興まちづくりを推進する
  ための覚書・協定等を締結。
- **事業計画策定**
  住民説明会や個別面談を通じて、
  住民の方々の意向を確認し、
  個別地区の事業計画を作成。
- **工事を加速し、一つ一つ着実に事業を完成**
  平成25年度末までに、受託した22地区すべての復興市街地整備地区で工事に着手。災害公営住宅は、平成28年1月までに1,785戸が完成。
- **復興計画策定支援等**
  1県18市町村に延べ61名の技術職員を派遣。
- **体制づくり**
  沿岸部の12市町に現地復興支援事務所を設置。

復興市街地整備事業

土地区画整理事業、防災集団移転促進事業などにより、
被災した市街地の嵩上げや高台新市街地の整備を行います。
UR都市機構は被災自治体より委託を受け、
計画策定から工事発注・監理までフルパッケージで事業を進めています。

重ダンプによる造成工事（宮城県東松島市）

現地見学会（岩手県山田町）

災害公営住宅整備事業

被災により住まいを失われた方、原子力災害により避難を余儀なくされている方のための公営住宅を整備します。UR都市機構は被災自治体からの要請により住宅を建設、完成後に自治体へ譲渡します。

市営四反田住宅（宮城県気仙沼市）

市営住宅川原アパート（岩手県大船渡市）

復興まちづくりコーディネート業務の実施

被災自治体からの委託により、UR都市機構はまちづくりの実績や技術力を活かし、
復興まちづくり事業計画策定業務、工事発注支援業務等を実施しています。

工事発注支援の相互協力協定締結（岩手県大槌町）

フォト＆スケッチ展概要

開催概要について

東日本大震災 復興フォト＆スケッチ展2015は、復興への歩みを広く発信することで被災地の復興を支援するため、「想い、つなぐ、明日へ」をテーマとして開催しました。

応募作品は、復興を感じる場面を題材とした写真、またはスケッチとし、皆様の被災地や復興に対する想いを、タイトルとメッセージで表現していただきました。応募資格は、できる限り多くの方々に参加していただくため、被災地にお住まいの方だけではなく、被災地を訪問された方やゆかりのある方等すべての方を対象としました（プロの写真家や画家の方を除く）。

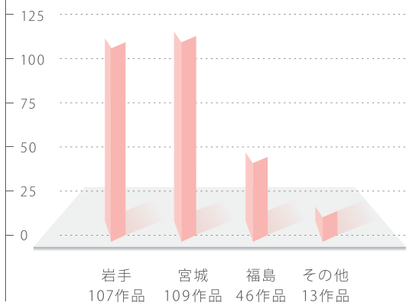
約4ヵ月の募集期間を経て、123名の皆様から、275作品（フォト258作品／スケッチ17作品）のご応募をいただきました。

その中から、4名の有識者審査員（以下、審査員）による審査とＵＲ職員投票により、復興の歩み大賞2作品（フォト・スケッチ各1作品。審査員による協議により選定）、復興の歩み賞5作品（各審査員1作品。ＵＲ職員投票による最多得票1作品）、入賞15作品（ＵＲ職員投票による上位作品）を選出しました。なお、審査過程では作品の応募者名を無記名とし、写真やスケッチの内容に加え、タイトルとメッセージを含めた総合的な評価をさせていただきました。

スケジュール

2015年 4月21日	開催予告
2015年 5月20日	開催発表
2015年 5月20日～9月15日	作品募集期間
2015年 9月～11月	応募作品の審査［ ＵＲ職員投票審査 → 有識者審査 ］
2015年 12月25日	審査結果の発表

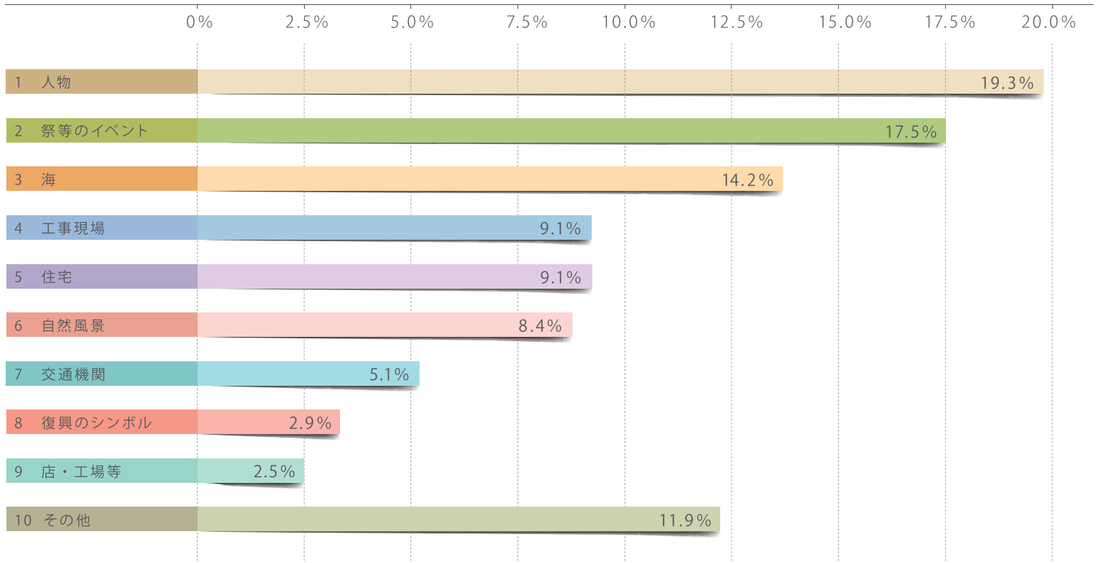
県別応募作品数（撮影・スケッチの対象場所）



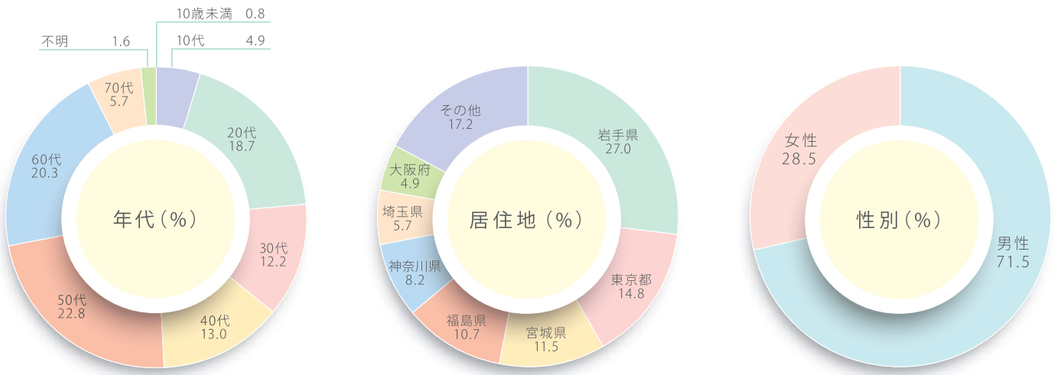
撮影・スケッチの対象として多く選ばれた場所

所在地	作品数		
宮城県気仙沼市	31作品	岩手県宮古市	13作品
岩手県陸前高田市	29作品	岩手県大船渡市	13作品
福島県いわき市	18作品	宮城県牡鹿郡女川町	12作品
宮城県石巻市	16作品	岩手県下閉伊郡岩泉町	11作品
岩手県釜石市	15作品	岩手県上閉伊郡大槌町	11作品

応募作品の分類



応募者の属性



審査員プロフィール

大西 みつぐ氏
写真家

東京綜合写真専門学校卒業。1985年「河口の町」で第22回太陽賞、1993年「遠い夏」ほかにより第18回木村伊兵衛写真賞受賞、江戸川区文化奨励賞受賞。1970年代から東京の下町を拠点として撮影活動を続けるほか、大学や専門学校などで若い世代を指導、また各カメラ雑誌において記事執筆、月例コンテスト審査員を歴任するなど写真愛好家へのアドバイスも積極的に行なっている。
日本写真協会、日本写真家協会会員、ニッコールクラブ顧問、大阪芸術大学客員教授。

千葉 学氏
建築家

1985年東京大学工学部建築学科卒業、1987年同大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了、株式会社日本設計、ファクターエヌ共同主宰を経て、2001年千葉学建築計画事務所設立。2009年-2010年スイス連邦工科大学客員教授、現在、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授。主な受賞に第27回村野藤吾賞（工学院大学125周年記念総合教育棟）、ユネスコ・アジア太平洋遺産賞功績賞（大多喜町役場）、2009年日本建築学会賞（作品）（日本盲導犬総合センター）など。

なかだ えり氏
イラストレーター

日本大学生産工学部建築工学科卒、法政大学工学部建築学科修士課程修了。フリーランスでイラスト、執筆、建築設計など多分野で活動中。東京・千住にて築200年の「蔵」をアトリエとしてきたが、2014年より元スナックをリノベーションした建物に拠点を移す。千住の古い建物を活用する活動に参加。著書に「大人女子よくばり週末旅手帖」（エクスナレッジ／2015年）、「駅弁女子～日本全国旅して食べて」（淡交社／2013年）、「奇跡の一本松～大津波をのりこえて」（汐文社／2011年）など。「奇跡の一本松」は平成27～30年度の小学校の道徳の教科書に掲載。

池邊 このみ氏
ランドスケーププランナー

千葉大学大学院教授、専門は造園デザイン学。千葉大学大学院博士課程修了、住信基礎研究所、ニッセイ基礎研究所等をへて、現職。2007年より3ヵ年、UR都市機構の都市デザインチームリーダーを兼務。学術会議連携会員、国土交通省社会資本整備審議会委員、文化庁名勝部門審議委員、国土交通省景観賞審査委員、陸前高田市文化財保全活用調査委員長、高田の松原復興祈念公園構想会議委員、都市景観大賞審査委員、都市公園コンクール審査委員等を務める。

総評

写真、スケッチともにたいへん見ごたえがありました。今までの復興の年月を通してみると、穏やかな写真が連なっていることが今年の特徴ではないかと思います。このような作品の中に現地の皆さんの気持ちを表す笑顔の作品もあり、ほっといたしました。復興の歩みにおいて、写真を撮り、記録として残していくことは、後に地域の記録として生かされると思います。

Mitsugu OHNISHI　Photographer

写真やスケッチ全体を通して、この1年の間に着実に復興が進んでいることが感じられました。日常生活に前向きに取り組んでいる姿を切り取った作品の数々を見るにつれ、皆さんの気持ちの変化も伝わってくるような思いがします。地域によって状況は様々ですが、そうした中でも確かな希望というものを感じることができました。復興のドキュメントとして今後もこの作品展が継続され、すばらしい作品に出会えることを期待しています。

Manabu CHIBA　Architect

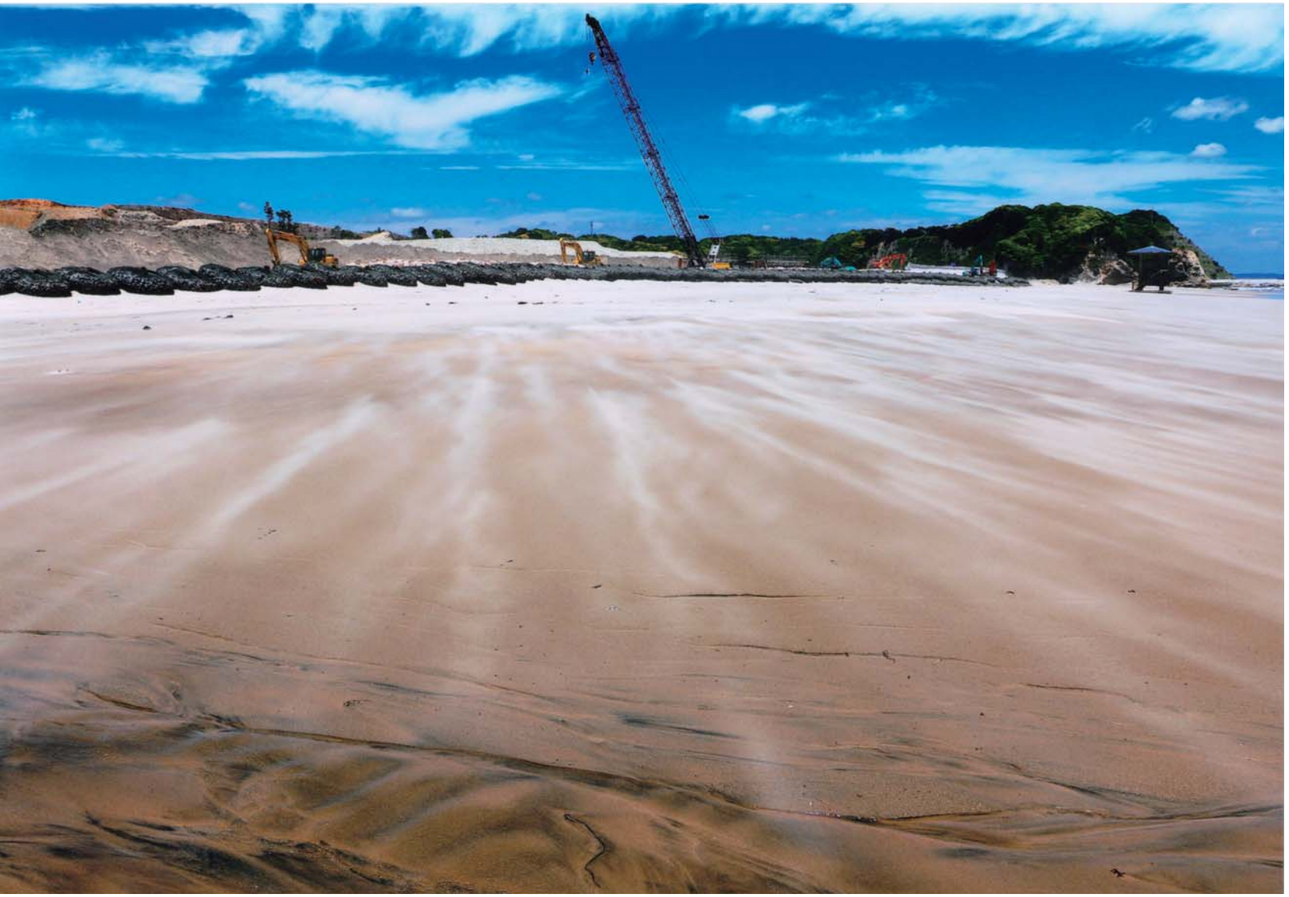
復興への歩みは、この1年で作品のテーマや切り取り方が大きく変わったように思いました。震災後に被災地の皆さんの心を支えてきたものから卒業して、次に進むための一歩を踏み出すことができているのではないでしょうか。5年という一つの区切りを迎え、写真やスケッチに表現された風景の変化を通して、現実的な進歩を感じることができました。

Eri NAKADA　Illustrator

鎮魂の意味が込められた重い作品が多くみられた昨年に比べ、今回はさまざまな要素を含む作品が多かったように思います。なかでも、東北の豊かな自然に目を向けて描写をした生き生きとした作品が印象に残りました。被災地の皆さんの復興に対する様々な気持ちが、少しでも日本中の人に伝わることを願っています。

Konomi IKEBE　Landscape planner

受賞作品・応募作品の紹介



大賞

復興の歩み大賞　フォト

復興への戦い

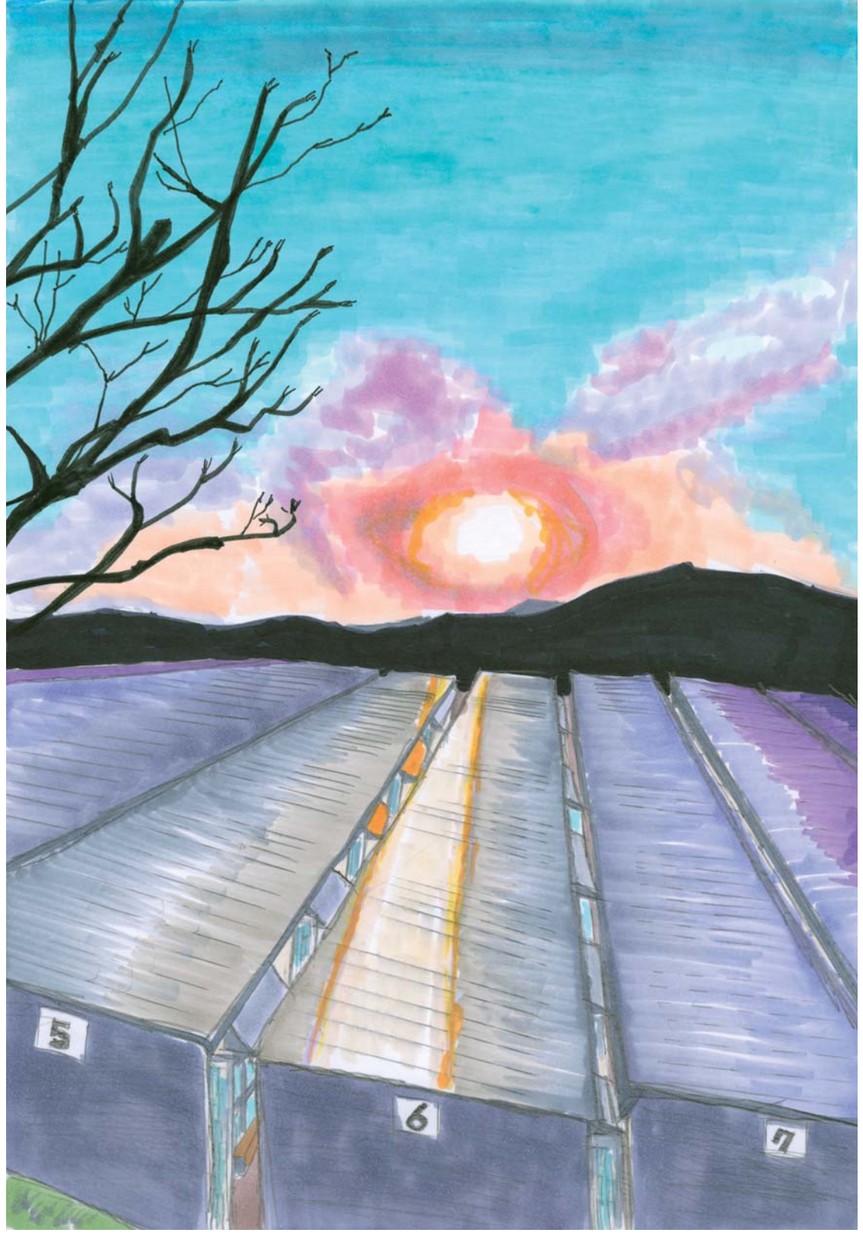
遠藤　清作

福島県　いわき市

薄磯海水浴場で復興へ向けて烈風と戦いながら、防波堤を急ピッチで改修工事をしている7台の重機の力強さを捉えました。厳しい自然環境の中、黙々と活動している重機の逞しさと作業者の一日でも早い復興完了への熱い思いが伝わってきました。

［審査員からのコメント］

美しく広がる砂浜、その表層を筋状に舞う砂、青い空と流れる雲、そして遥か向こうに見えるクレーンやブルドーザ。一見静かな写真だが、まるでその場の音が聞こえてきそうな臨場感に溢れている。写真から伝わる自然の音、重機の音、そして人気のない砂浜が織り成す光景は、福島が抱える問題の複雑さを浮き彫りにしつつも、復興に取り組む人々のひたむきさを感じさせてくれる。　［ 千葉 学 ］



大賞

復興の歩み大賞　スケッチ

静かな夕暮れとそこにある生活

浅野　健仁

宮城県　本吉郡南三陸町

自分が暮らす仮設住宅団地に沈む夕日の光景を描いてみました。最初は生きづらかったここでの生活も4年も住むと、様々な空や四季の表情を見てくることができました。人々が寝静まる夕暮れ、優しく淡い空の色とそこに映る影と感じられる生活というもの描き表現してみました。

［審査員からのコメント］

仮設住宅の諸問題は現地でも見聞きしたり、報道等でも知るところでしたが、新居が決まった作者が、その4年間の暮らしをも尊いと感謝し、新しい未来に向かっていく様子が伝わってきます。周辺をシルエットで描いたことで、人間に対し時に厳しく時に寄り添う自然との関係性も感じられます。
［ なかだ えり ］

復興の歩み賞（大西　みつぐ　選）

朝活の田んぼに映る空

西村　清巳

宮城県　岩沼市

朝4時半に起きて朝活ウォーキングを始めて20日。人気の無い朝の特別な空気を独り占めしながら毎日同じ風景でも毎日違う癒しを感じられます。朝を迎える事が特別なご褒美となった習慣。被災地の美しい水田に素晴らしい恵みを実感します。

［審査員からのコメント］

朝のウォーキング。そうしたあたり前の日常とそこですれ違う「普通の風景」を愛でることの幸せ。震災復興の道筋の中で作者の胸に去来した安堵感が美しく表現されています。田んぼを大胆に画面に入れた構成は雲を印象的に浮かび上がらせました。また縦位置の構図はご自分の足もとから続く風景の連なりをよく伝えています。　［ 大西 みつぐ ］

復興の歩み賞（千葉　学　選）

私たち元気です　有田　勉

岩手県　宮古市

震災の年、流された家の基礎に座り私に笑顔で話かける夫婦。聞くと家族は一早く避難して無事。生きることが一番と言っていた。

［審査員からのコメント］

東日本大震災からまもなく5年。津波に流されずに残ったコンクリートの基礎とそこに生い茂る雑草、そんなことを気にも留めないかのごとくに腰掛け、満面の笑みを見せる夫婦。これらの風景が見せるコントラストは、決して容易ではない復興の道のりと、そしてその中でも前向きに生きて行こうとしている人の力と希望を伝えてくれている。　［ 千葉 学 ］

復興の歩み賞（なかだ　えり　選）

さよならマリンピア

橘川　天知

宮城県　宮城郡松島町

松島町のマリンピア松島水族館は津波で大きな損害を被りながらも復興を遂げました。施設の老朽化により今年閉館したものの震災に負けなかったマリンピアは多くの希望を与えてくれました。震災後に訪れた際撮影した写真を元に、おつかれ様という気持ちと移転先の新水族館への期待をこめて今回の作品を制作しました。

［審査員からのコメント］

はじめは、夕暮れの景色に終わりゆくさみしさを感じましたが、よくよく何度も見るうちに、おつかれさまの感謝や温かさ、いたわり、そして前向きな激励まで伝わってきました。看板はポップで詳細に、景色はやわらかく描いた対比も見事。想いの伝わる上手な作品です。　［ なかだ えり ］

復興の歩み賞（池邊　このみ　選）

浦の浜防潮林　　高橋　義章

岩手県　下閉伊郡山田町

かつては防潮林があり、浦の浜海水浴場として知られ、風光明媚な場所だった。東日本大震災により、防潮林や防潮堤のすべてがなぎ倒され、大津波の恐ろしさをまざまざと見せつけられたが、ようやく木々が植えられた。早く育ってほしい願いと以前と変わらない賑わいを取り戻してほしい。

［審査員からのコメント］

浦の浜の防潮林の再生の様子が、海の青の美しさと岬の緑と共に切り取られた美しい写真です。風光明媚な場所であったとコメントにもありますが、新しく植えられた防潮林の小さな苗と、苗を囲む柵の景観が、浜の新しい命の再生を感じさせます。早く育って、以前と変わらない賑わいをという撮影者の熱い思いが伝わってくる素晴らしい作品です。
［ 池邊 このみ ］

復興の歩み賞（UR都市機構 選）

孫だくさん

岡　博大

宮城県　気仙沼市

「孫がたくさんできた」と喜ぶ宮城県気仙沼市大島在住のおばあちゃんと立教大生ら。立教大学コミュニティ福祉学部「東日本大震災復興支援プロジェクト」では毎月、大学生が大島中学校仮設住宅などを訪問して、住民の皆さんと交流を続けています。島のおじいちゃん、おばあちゃん、また歓迎のアーチを作りに帰るから待っててね！

UR都市機構の職員投票により最多得票を獲得した作品です。

入賞

ありがとうベルコン

大谷　桂太　　岩手県　陸前高田市

朝焼けに浮かび上がるベルトコンベアーのシルエット。陸前高田市の気仙川にかかる総延長3㌔におよぶベルトコンベアー。被災市街地土地区画整理事業の一環で、山から切り出した土砂を毎日5万5000トンも運び続け平成25年9月にその役割を終える。1年半にわたる大事業を成し遂げたベルトコンベアーに感謝したい。

入賞

強く・元気に・逞しく

佐々木　均　　宮城県　東松島市

東松島市大曲地区の春の青いこいのぼり、全国からコイが集まり大空を泳いでいます。強く・元気に・逞しく。

入賞

大きな一歩

石森　文夫　　福島県　いわき市

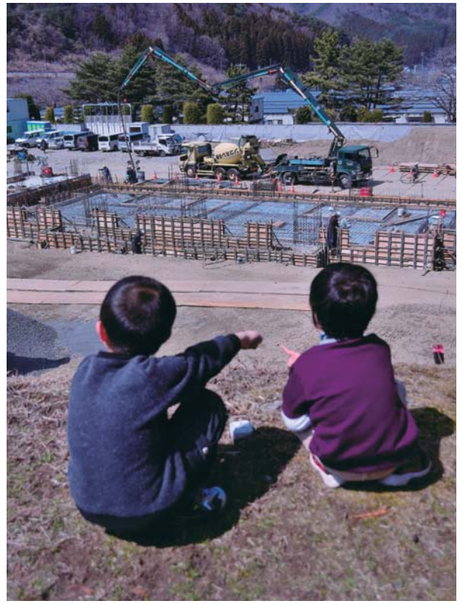
海辺に人が戻った。とりわけ子どもの元気は、大人が踏み出す勇気になる。この女の子の一歩は、両親のこれからの大きな一歩になるに違いない。

入賞

復活した相馬野馬追い祭

坂本　禮三　　福島県　南相馬市

東日本大震災の後、第一原発事故で避難地域に指定され、関係者が避難を余儀なくさせられたため、参加する人と馬の確保が難しく、また、風評により集客が懸念された。しかし、関係者の懸命な努力により事故後2年目から徐々に回復し、4年目の今年は出場馬も450騎を確保、観客は事故前を上回る5万4千人以上の観客が県内外から集まり、盛大に開催された。



入賞

おうちが建つよ

遠藤　顕一　　岩手県　釜石市

高校の跡地に復興アパート7階建ての基礎工事が進んでいます。大きなアパートの完成を楽しみに近所の子供達が毎日のように近くで遊んでいます。あたりには、まだ仮設住宅が密集してます。当時のスナップで、子供ながらの待ちわびたアパートの完成の期待をスナップしました。

入賞

希望

垂　秀夫　　宮城県　宮城郡松島町

早朝、宮城県松島で撮影。大地震、津波があったことがまるで嘘かのような、そんな静かな朝でした。日の出が希望を告げているようでした。

入賞

賑わう仮設商店街

村上　淳　　宮城県　気仙沼市

気仙沼市の仮設商店街の賑わいです。全国から届いた、手書きのこいのぼりがとても素敵です。このような賑わいが新しい商店街でも続いてほしいですね。

入賞

活気もどった気仙沼

進藤　ヒサ子　　宮城県　気仙沼市

テレビドキュメント番組を見てびっくり。四年前瓦礫で埋めつくされた港の画像。今はみちがえるように活気をとりもどしていました。かつおが捕れたぞ！なんと力強い響き。思わず拍手、漁師たちの笑顔、笑顔。ここまでたどりつくまでの大変な頑張りと努力を物語っているように思います。

入賞

待ってました！気仙沼のサンマ

小田　まゆみ　　宮城県　気仙沼市

サンマ船の入港に沸く故郷気仙沼から、走りのサンマが届いた。待ってましたと蓋を開け、キラキラのサンマとご対面。お刺身に塩焼きに、つみれも良いな！骨まで軟らかく炊こうかな・・・。
震災から5回目の秋。故郷の誇りと頑張りを詰めて、今年のサンマもとびきり新鮮、とびきり美味しい！いつもの嬉しい秋がやってきた。

入賞

再び「ひょうたん島へ」

新田　知沙　　岩手県　上閉伊郡大槌町

震災で失われた防潮堤が再建されて、「ひょうたん島」へ再び歩いて渡れるようになりました。
温かい希望を感じた瞬間でした。

入賞

小学校と花火と笑顔

山内　若菜　　岩手県　陸前高田市

陸前高田市の小学校の復興イベントで、小学生の似顔絵描きボランティアをしていたら、そのうちの女の子の1人が「笑顔の私を描いて下さい」と言ってきた。あの日、私は変わったと思う。震災で傷ついた小学生。何気なく笑う時も、笑える事をとてもありがたく思え、たくましさをいただくことを知った日。女の子は、ちっとも笑っていなかった。

入賞

見送り

澤口　健治　岩手県　下閉伊郡田野畑村

北三陸鉄道復旧全線開通。祝いに駆けつけた東京の私鉄の皆さん。同業者のエールの交換をしているところです。

入賞

笑顔戻る漁港

櫛桁　允法　　岩手県　九戸郡野田村

震災から4年。少しずつ活気や笑顔が戻りつつある漁港の人達を写しました。

入賞

激走

島　宏幸　　福島県　南相馬市

福島県相馬地方に1000年以上伝わる伝統行事、相馬野馬追の一コマ。それぞれに苦難を抱えながら、伝統の継承及び復興への期待を一身に背負って激走する荒武者の姿を目撃した。

入賞

それでも海と…

安川　洋太　　宮城県　塩竈市

塩竈市浦戸の桂島で撮影した一枚。
甚大な津波被害を受けた桂島。そんな桂島の島民の多くは漁業従事者。そして夏期は桂島海水浴場への観光客も島の収入源のひとつ。写真は海岸への道標と、背景には復興工事。
津波を起こした海、しかしこれからも海と共に生活していく島の人々。そんなコントラストを感じた瞬間。

応募作品
岩手

岩手県大船渡市

岩手県釜石市

岩手県九戸郡野田村

岩手県下閉伊郡岩泉町

岩手県下閉伊郡岩泉町

岩手県陸前高田市

岩手県宮古市

岩手県陸前高田市

岩手県宮古市

岩手県上閉伊郡大槌町

岩手県釜石市

岩手県陸前高田市

岩手県宮古市

岩手県大船渡市

岩手県陸前高田市

岩手県陸前高田市

岩手県大船渡市

岩手県陸前高田市

岩手県久慈市

岩手県陸前高田市

岩手県宮古市

岩手県大船渡市

岩手県陸前高田市

岩手県下閉伊郡岩泉町

岩手県下閉伊郡岩泉町

岩手県下閉伊郡岩泉町

岩手県下閉伊郡岩泉町

岩手県大船渡市

岩手県下閉伊郡岩泉町

岩手県下閉伊郡岩泉町

岩手県九戸郡野田村

岩手県上閉伊郡大槌町

岩手県陸前高田市

岩手県陸前高田市

岩手県上閉伊郡大槌町

岩手県下閉伊郡山田町

岩手県陸前高田市

岩手県陸前高田市

岩手県大船渡市

岩手県陸前高田市

岩手県釜石市

岩手県釜石市

岩手県下閉伊郡岩泉町

岩手県陸前高田市

岩手県宮古市

宮城県宮城郡松島町

宮城県塩竈市

宮城県気仙沼市

宮 城

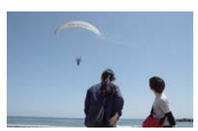
宮城県石巻市

宮城県気仙沼市

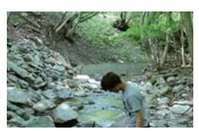
宮城県石巻市

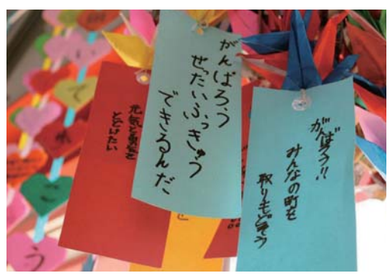
宮城県気仙沼市

宮城県石巻市


宮城県宮城郡七ヶ浜町

宮城県石巻市


宮城県石巻市



宮城県宮城郡七ヶ浜町

宮城

宮城県本吉郡南三陸町

宮城県石巻市

宮城県気仙沼市

宮城県気仙沼市

宮城県牡鹿郡女川町

宮城県牡鹿郡女川町

宮城県石巻市

宮城県亘理郡亘理町

宮城県牡鹿郡女川町

宮城県石巻市

宮城県気仙沼市

宮城県仙台市

宮城県東松島市

宮城県仙台市

宮城県気仙沼市

宮城県牡鹿郡女川町

宮城県気仙沼市

宮城県石巻市

宮城県石巻市

宮城県石巻市

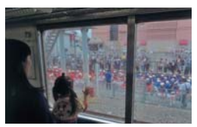
宮城県名取市

宮城県気仙沼市

宮城県気仙沼市

宮城県牡鹿郡女川町

宮城県気仙沼市


宮城県石巻市

宮城県塩竈市

福島

福島県相馬市

福島県いわき市

福島県福島市

福島県いわき市

福島県いわき市

福島県南相馬市

福島県南相馬市

福島県会津若松市

福島県南相馬市

福島県いわき市

福島県福島市

福島県双葉郡富岡町

福島県双葉郡富岡町

福島県双葉郡大熊町

福島県いわき市

福島県双葉郡大熊町

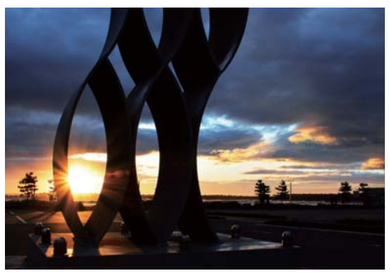
福島県双葉郡浪江町

福島県相馬市

福島県いわき市

福島県いわき市

青森


青森県三沢市

審査の風景

今回で2回目を迎える「東日本大震災 復興フォト＆スケッチ展2015」には、多くの作品が寄せられました。一つひとつの作品に、復興へ向けての強い思い、明日への希望が込められています。そのような作品に触れ、審査員の皆さんはどのような思いを抱いたのでしょうか。各賞の受賞作品を紹介するとともに、審査の風景をお届けします。

復興の歩み大賞
フォト
「復興への戦い」

大西 みつぐ　今回応募された作品には、工事現場の役割がそろそろ終わるとか、元気が出てきましたというようなメッセージもいただいているようですね。復興現場の雰囲気そのものが表れていなくてもいいのかもしれません。写真だからこそ、そうしたとらえ方ができるのではないでしょうか。

千葉 学　昨年からすれば1年というわずかな時間ですが、その間に着実に復興は進んで、皆さんの気持ちもそれぞれ変わってきていると感じられました。住まれている方々、被災地の方々だけではなく、写真を撮る方々の気持ちも変わってきているということが写真を通じてわかり、大変よかったと思っています。

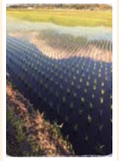
大西 みつぐ氏

千葉 学氏

復興の歩み大賞
スケッチ
「静かな夕暮れと そこにある生活」

なかだ えり　新居に引越されるので、今回の作品を描かれたということですが、仮設住宅は悪い面もあったと思いますが、4年間で次第に馴染んできて、次に進むステップを踏み出す今、これまでの生活に感謝する気持ちが伝わってきます。震災から4年、5年たち、一つの区切りを迎えつつあることを強く感じました。

風景の変化についても区切りかな、と感じます。忘れがちとはいわれますが、やはり復興は着実に進んでいるということもわかりました。



復興の歩み賞
（大西 みつぐ 選）
「朝活の田んぼに 映る空」

なかだ えり　素敵な写真だと思います。

大西 みつぐ　あたりまえの風景をこれから大事にしていこうという気持ちが今続いていることが大事なんだと思います。米が実ったり、空を見上げたり、田んぼを常に見ていくことなどが大事なのではないでしょうか。メッセージには、朝４時半からのウォーキングを始めて20日間ということで、人気のない朝に一人でウォーキングをしていると、こうした朝を迎えることが特別なご褒美になると書いてありました。そこに、個人のたしかな目線があるということなんだと思います。

なかだ えり氏

池邊 このみ氏

復興の歩み賞
（千葉 学 選）
「私たち 元気です」

千葉 学　流されずに残った基礎だけがあるような風景に腰かけてはいるものの、手に持っているものは草を刈る道具なんですね。

非常に前向きにさまざまな生活に取り組んでいることがよく伝わってきて、大変うれしく思いました。

ただ、その一方で、震災から間もなく5年になろうとしている今、復興の状況については、地域によってばらつきが出てきているのかなと感じられる写真も何枚かあり、複雑な思いで見ました。

大西 みつぐ　ご夫婦の笑顔を見て、ちょっとほっとしました。カメラを持って皆さんの輪の中に飛び込んで行くことは、現地にいる皆さんができる一つの復興の証だと思います。

カメラをコミュニケーションの道具として役立てていく努力も必要なのではないかなという気がします。

また、そうして撮った写真はいずれ、地域のアーカイブとして生きてくるのではないでしょうか。

復興の歩み賞
（なかだ えり 選）
「さよなら マリンピア」

なかだ えり　若い男性の作品なんですね。さよなら感と夕暮れが合っていて、絵がとてもお上手だなと思いました。閉館したとのことで少し悲しい気持ちも感じられます。

大西 みつぐ　メッセージに、「おつかれ様という気持ちと移転先の新水族館への期待をこめて」と書いてありますね。

なかだ えり　たしかに、おつかれさまの感謝や温かさ、前向きな激励までが伝わってきます。

復興の歩み賞
（池邊 このみ 選）
「浦の浜防潮林」

池邊 このみ　海の色がきれいですね。今回は被災地においても自然がきちんと出てきている作品が多いように感じられますね。

写真では田んぼや防潮林を写していたり、スケッチでは仮設の後ろに夕映えと樹木が山の端と一緒に描かれていたり…。

東北の多様な自然のなかで生活していらした方々が人工的な空間の中に押し込められて非常に苦しい思いをなさっていたのが、解き放たれるように、自然や空気、空、水などに目を向けるようになってきたのではないかと思います。

復興の歩み賞
（UR都市機構 選）
「孫だくさん」

池邊 このみ　高齢者の方に対してみんなが暖かく笑顔で、しゃべりかけていて、それを受け答えられる高齢者の方も笑顔でいるという1コマがとても印象的です。

また仮設住宅が、血の通ったコミュニティの場所として根づいてきている、そういう空間の暖かさみたいなものがより伝わってくるような感じがします。

フォト & スケッチ展の実施につきまして、応募者の皆様及びご協力いただいた皆様に、深くお礼申し上げます。

http://www.ur-net.go.jp/saigai/

企画・発行　独立行政法人都市再生機構　技術・コスト管理部　都市再生設計チーム
震災復興支援室　企画チーム
〒231-8315 神奈川県横浜市中区本町6-50-1 横浜アイランドタワー

制　　作　株式会社URリンケージ 都市・居住本部　企画設計部

2016年 2月発行

※本誌の写真および内容を無断で複写・転載することを禁じます。